

# 古代都市再考

— 起源と定義 —

山藤正敏

## I はじめに

都市 (City) あるいは都市性 (Urbanism) は、発達した人類社会の特徴として、人文科学・社会科学の諸分野で古くから研究の題材となってきた (e.g., Burgess1926、Wirth1938)。考古学においては、世界各地の都市的な大型居住地遺跡が数々発掘され、そこからは壮大な建築遺構や顕著な遺物が多数発見されてきた (e.g., Feinman・Marcus1997、Marcus・Sabloff2008)。社会学では、中世ヨーロッパの伝統的都市を念頭にしばしば具体像が描かれている (ギデンズ2002: p.538)。このような現象としての顕著さとは裏腹に、古代都市を定義することは難しい。古代都市を大型村落から、論理的に明確に区別することが可能なのか。異なる地域・時代を通じて共通する特徴を認識できるのか。

このような課題にアプローチするために、本稿では先行研究に立ち返って、基本的な情報を探ることにした。ここで扱う基本的な情報とは、①古代都市が出現する社会的文脈あるいは段階に関する認識、そして、②古代都市の定義 (認識)、である。古代都市の出現は、複雑化社会の発達との相関が考えられ、こうした社会の形成に関する一般理論を見返すことは有益と思われる。都市の出現背景を踏まえた後に、古代都市の「捉え方」を概観する。古代都市の定義を示した先行研究は多数あるが、個別具体的な現象としての古代都市に一般的な特徴を必ずしも見出すことができるとは思えない。そこで、先行研究から主な観点を抽出し、古代都市の本質を把握するための体系を整備できないかと考えた。

上記の基礎的情報を踏まえて、本稿の第4節では、古代都市を捉えるための新たな属性を提示する。また、事例として前4千年紀末のシリア・メソポタミアと前3千年紀前半の南レヴァントにおける大型居住地遺跡を取り上げる。両地域とも西アジアに位置するが、これらは極めて異なる文化を有することが認識してきた。この新たな属性により、大型居住地遺跡の都市的特徴を合理的かつ多角的に例示したい。

## II 社会の複雑化と都市の発生

### 1 複雑化社会の認識

社会の複雑化に関する研究は、19世紀後半の進化主義（Evolutionism）人類学により牽引された（Tylor1865、Morgan1877（モルガン1961）、Spencer1878、別府1959）。1940年代には進化主義が再興し（White1949、Steward1949・1955、米山1965）、1970年代にかけて新進化主義（Neoevolutionism）として、世界各地の民族誌データと考古学の成果に基づいて、同時代および古代の諸文化を類型化し、文化・社会進化の諸段階として序列化するに至った（Sahlins1958、Service1962・1975、Fried1967）。この類型化・序列化において重要なのは、狩猟・採集社会と国家社会の間に中間的段階を設定したことにある。「先国家（Prestate）」的としばし捉えられることからも（e.g., Feinman・Neitzel1984：p.39）、この段階をより複雑化した社会とみなせるだろう。

この先国家社会は一般的に「首長制（Chiefdom）」の名で知られ、首長の権威により統治されていたと考えられている。この首長を核とした統治体制は、恒常化・制度化されることではなく、法を司る官僚機構も政務に特化した建造物も見られない。社会構造は血縁集団（リニージ）に基づき、首長およびその近縁者からなる上位集団と、それ以外の下位集団の2階層に概ね分かれる。各集団（村落）にはいずれも首長が存在し、これらを束ねる最高首長の下で、1つの共同体を形成する。このため、人口規模・密度ともに、これ以前の社会に比べて必然的に大規模（数百～数千人）になる。経済的側面については、とくに、余剰の生産、専業化、そして集積・再分配が議論されてきた。E.サービスは、「首長制」社会の生産性が増加したことにより、交換に用いる余剰が増加し、それにより首長などの援助（再分配）を受けた専業工人が出現した（専業化の促進）と考えた（Service1962：p.147）。この結果、社会の生産レベルは向上し、専業工人と再分配が社会的・経済的に不可欠になることで、首長の権威が高まったとする（Service1962：pp.147-148）。他方、M.フリードは、「ランク社会（Rank society）」における専業化を明白に認めておらず、首長を含む全構成員による季節的な集約農耕への従事には触れている（Fried1967：p.115、pp.129-131）。

これに対して、「国家（State）」は、その社会・政治形態において先国家社会と大きく異なる。その社会は、階級（Class）を基礎とするより複雑な社会階層を明確に示す（Service1962：pp.171-172、Fried1967：pp.229-235）<sup>1</sup>。また、公式かつ恒常的な統治機構（官僚制・政府）が存在し、この機構が法的に担保された権力を唯一行使する。権力の機能は、①税の徴収、②労働力の動員、また、③法の執行、が主要なものと考えられる（Service1975、Carneiro1970・1981）。このように、複雑な階層制と集権的な統治機構を有する社会は、多数の共同体をその領域内に内包しており、人口規模も大きい。

ところで、先国家社会はより単純な形態とより複雑な形態を含んでいる。R.カーネイロはこの点を考慮し、「首長制」社会をその規模に応じて、最小（Minimal）（1ダース程度の村落のまとまり、人口数百名）、典型（Typical）（数十程度の村落のまとまり、人口規模は数千名から1万名超）、最大（Maximal）（ハワイやタヒチなど、国家段階に近い）に細分した（Carneiro1981）。また、G.ファインマンとJ.ナイツエルは、アメリカ大陸における先国家段階の諸社会を対象として、首長の機能、地位の差別化、政治的決定のレヴェル（階層）、セトルメント・パターンを比較し、これらの様相が著しく多様であることを明らかにした（Feinman・Neitzel1984）。なお、より複雑な形態を示す先国家社会は概してより発達した階層性と専業化を特徴とするが、社会関係の基礎は依然として血縁集団にあり、公式な統治機構を持たない。例えば、M.D.サーリンズのポリネシア社会研究において「Group 1」に分類される社会（ハワイ、トンガ、サモア、タヒチ）では3段階の階層制が認められ、首長の権限が極めて強力であった（Sahlins1958: pp.10-12）。また、フリードによる理論モデルである「階層化社会（Stratified Societies）」では、個々の文化に固有の基礎的資源へのアクセス権が特定集団に限定されることで不平等化（階層化）が進み、多くの労働力が生業生産から離れて専業的労働に従事する（専業化）と考えられた（Fried1967: pp.186-187）。

## 2 考古学から見る複雑化社会

社会の複雑化は、考古学からも追求されてきた。1950年代には、史的唯物論に基づいて複雑化社会の成立を論じる傾向が強くみられる。V.G.チャイルドは人類史における「都市革命」を論じ、文明（=国家）の特徴を述べている（Childe1936・1950、チャイルド1957）<sup>2</sup>。これによれば、「都市革命」とは自給自足経済からの脱却、都市経済の開始、国家の出現を指している。その特徴は、十分な食料供給とそれによる人口の増加、灌漑などの大規模土木事業の開始、資源不足を補完する対外交易の開始、多様な職業の専業化（分掌化）、軍隊の創出、文字記録、官僚機構の成立、階級の発生、そして都市の発生にある（Childe1936、チャイルド1957）。チャイルドの影響を強く受けたR.McC.アダムスは、主にメソアメリカ、ペルー、メソポタミアの考古学的事例に基づいて、国家成立前後の社会の特徴を論じている（Adams1956）。いわゆる国家段階の直前に当たる「繁栄期／古典期（Florescent or Classical Era）」には神權的な首長の権威に基づいて共同体が統合され、神殿に付属する小規模な工芸専業集団の成立や灌漑・モニュメント建設のための大規模な労働力の動員が可能となつたが、階級は未発達であった。次の「軍国主義／王朝期（Militaristic or Dynastic Era）」は国家段階にあたり、世俗的な権力が出現・拡大し、市場経済の発達、工芸専業化の進展、階級の発達、国家間戦争の恒常化により特徴づけられた。

1960年代に興隆したプロセス考古学は、一般法則の確立を目指す新進化主義人類学と親

和的であり、両者は容易に結びついた (Johnson2020 : p.25)。この潮流の中で、先国家社会の概念もまた考古学に援用されたが、一般法則と自然環境を重視する仮説検証的な研究姿勢と、新進化主義に基づく人類社会の類型化への批判が次第に大きくなり、個別具体的な要素（文化の特異性・多様性）により着目したアプローチが採られるようになった (e.g., Flannery1972, Renfrew1973・1974、レンフルー1979, Earle1987・1991, Kristiansen1991, Wright1994、トリッガー2001、Trigger2003)。T.アールは、ポリネシア、環カリブ海域、北アメリカ南東部、ヨーロッパを主たる研究対象として、「首長制」を①統合の規模、②意思決定の中心性、そして③階層化、から改めて特徴づけた (Earle1987)。社会（共同体）の規模が大きくなるほど複雑性は増し、文化毎に発現形態に特異性がみられることを考慮しつつも、「首長制」社会に通有な特徴を抽出したことは重要である。また、K.クリスティアンセンは、それまでの「首長制」から「複雑な首長制 (Complex chiefdoms)」あるいは「階層化社会 (Stratified society)」を分離し、「古拙国家 (Archaic states)」をも含む社会類型として論じている (Kristiansen1991)。この「階層化社会」は、国家と「首長制」の過渡的段階と捉えられており、「非集権化階層社会 (Decentralized stratified society)」と「集権化古拙国家 (Centralized archaic state)」に細分された。「非集権化階層社会」では、首長／王が非集約的な生業的生産に依拠する村落共同体から貢納・税を徴収し、交易や工芸生産のための拠点を展開することで、間接的に支配する。土地は私有が原則であり、官僚組織は制度化されていない。他方、「集権化古拙国家」では、貢納・税収のために公有地が管理される。支配者層の存在と生産・交易・宗教活動の管理機構が合法化・制度化され、高い余剰生産に基づいて労働力が組織化されることで、モニュメント建設、工芸生産、交易が可能になった。

考古学における国家段階の社会への関心は、その成立背景に向けられていた。このため、世界各地の1次国家（特定域内において自律的に成立した国家）を対象として、その発生因と特徴が論じられてきた (e.g., Adams1966, Flannery1972, Yoffee1993・2004, Feinman・Marcus1997、トリッガー2001、Trigger2003、Smith2012)。複雑化社会への生態学的アプローチを試みたK.V. フラナリーは、「階層化社会 (Stratified society)」 (=国家) についても述べている (Flannery1972)。論考には、集権化された行政機構の存在や職業的な支配者階級の成立など、新進化主義人類学から援用された特徴が並ぶが、社会の隅々にまでいきわたる高度な専業化とこれに基づく居住パターンの形成、互酬・再分配・市場からなる多重経済構造は、考古学的成果からフィードバックされた特徴である。B.G. トリッガーは、文明固有の要素の重要性を十分認識しつつも、個別事例の比較研究を通じて国家段階の社会に通文化的な規則性を見出そうとした (トリッガー2001)。その社会では技術レヴェルに大きな変化はないが、社会全体の管理が階級制に基づき、法的に安定した支配者階級により

労働力の強制的な動員・組織化が可能になった、とされた(Trigger2003)。また、N.ヨッフィーは、法・生産・分配を統合し、独占的に管理するための効率的な情報加工装置として国家を捉えた(Yoffee1993・2004)。これを裏付けるのは、生産・貯蔵・分配・交換に基づく経済的権力、都市的中心やある種の象徴に依拠する社会的権力、支配者階級により永続的に行使される政治的権力であり、これらが同時に発達する必要性を論じた。

### 3 都市の位置付け(表1)

文化人類学と考古学における複雑化社会の研究を概観したが、都市はどの程度複雑な社会で生じたと考えられてきたのだろうか。

国家段階の社会が都市をともなうことは、ほぼ一致した見解である。考古学においては、文明の本質的かつ必須の特徴としての直接的言及(Childe1936、Trigger2003:p.120)、あるいは、フルタイムの専業工人の多くが暮らす場所(Flannery1972:p.404)や社会的権力が形成される空間としての都市的コンプレックス(Yoffee1993:p.70)といった間接的な言及が見られ、いずれでも都市が重要視されていることに変わりはない。他方、文化人類学では国家における都市の存在への言及がほとんど見られない。その中で、サービスは「都市(Cities)は、古拙文明の発達に本質的でもなければその発達と緊密に関連しえしない」(Service1975:p.xii)と述べ、都市を国家に必要な条件とは考えていなかった。ただし、「それら(urban centers)は…ほとんどいつも明らかに先行して発達した文明によ

表1 複雑化社会の認識

	都市・集落に関する言及	主な特徴
文化人類学		
ランク社会(Fried 1967)	×村落のみ存在	
首長制(Carneiro 1981)	△首都的な村落・町	首長制を3つに細分(最小・典型・最大)、多様性を認識。
地域発展・繁栄期(Steward 1949, 1955)	○メソポタミア・エジプトにおける都市化	北ペルー、メソアメリカ、メソポタミア、エジプト、中国の古代社会に焦点(考古学の成果から)
国家=文明(Service 1975)	△国家にとって都市は非本質的	
考古学		
首長制(Flannery 1972)	×村落のみ存在	階級が存在しない。
首長制(Earle 1987)	△社会毎に異なるが、中心的居住地への人口の集中はこの段階で見られるか	「首長制」に分類される社会の多様性を念頭に置く。
非集権化階層社会(Kristiansen 1991)	△町は存在しない。管理された貿易港や生産センターは町に発達する可能性。	階層化社会
文明(Childe 1936, チャイルド1957)	○文明の本質的特徴	考古学的証拠からの議論、経済的側面を重視。
軍国主義／王朝期(Adams 1956)	○都市の生活様式	世俗的権力による国家統治
国家(Flannery 1972)	○専業工人が区画別に暮らす場所として存在	考古学的証拠に基づく。
初期文明(Trigger 1993, 2003)	○都市的中心の重要性	階級社会の最初期かつ最も単純な形態
国家(Yoffee 1993, 2004)	○都市的コンプレックス	社会的権力が形成される空間として

るものである」(Service1975 : p. 8) とも述べており、サービスの議論の対象には、1次国家のみならず、後続する2次・3次国家も含まれると推測できる。2次・3次国家をも含んだ議論では、都市の意義づけが異なるのも当然であろう。

先国家社会は、人口規模・密度が増大した定住社会であるため、段階的な集住は容易に推測できる。しかし、基本的に都市の存在について言及されていないか、村落のみ存在が認められている場合 (Fried1967, Flannery1972) がほとんどであった。ただし、都市の存在について示唆的な言及もある。アールは、増大した人口が当該社会の中心地に集住する居住パターンを想定した (Earle1987 : p.288)。また、クリスティアンセンは、「非集権化階層社会」において小規模な「町」が発達する可能性を示唆した (Kristiansen1991 : pp.19-20)。文化人類学からは、「首長制」における首都的な村落あるいは「町」の存在が肯定された (Carneiro1981 : p.54)。こうした言及はとくに、より複雑な先国家社会にフォーカスしている。

以上から、都市は1次国家の成立に必須の要件と認識されており、その起源は階層化と専業化が進んだ、より複雑な先国家社会に遡りうる、といえる。

### III 古代都市の認識論

#### 1 都市の定義について

古代都市は、先述の先国家社会・国家社会の研究とリンクして、さまざまに定義されてきた。既往の定義は、大きく2つに分類できる。1つは、すべての都市を包含する定義は不可能であるため、包括的な特徴のみを提示する立場（包括的定義）である。古くはL.ワースによる社会学的定義として、「社会的に異質な個人の、相対的に大きく密で永続的な居住地」(Wirth1938 : p. 8) が挙げられる。考古学の立場からは、トリッガーが「より広大な後背地との関係において、専業化された諸機能を果たす居住地の単位」(Trigger1972 : p.577) と述べ、都市を機能論的に定義した。最近ではM.L.スミスによる、都市とは「日常生活の多くの側面において、多様な潜在的行動における選択の可能性が開かれている場所」(Smith2019 : p.13) とする、より質的かつエミックな捉え方が印象的である。

他方、都市の特徴を列挙して体系的に捉えようとする試み（体系的定義）もある。チャイルドによる史的唯物論の観点から提示された10項目の定義 (Childe1950) をはじめとして、こうした定義はこれまで数多く示されてきた (Bietak1979, Kostof1991, Renfrew2008 etc.)。これらは各々、すべての項目を満たすことが必要とは論じておらず、また、最近では各項目があくまでも相対的な指標とされており (e.g., Marcus・Sabloff2008, Smith2019)、柔軟性を維持している<sup>3</sup>。

固有の地理的・歴史的文脈で成立した古代都市を通文化的に一括して定義することは、考古学的知見がさらに蓄積した今日、ますます困難になっている。そこで重要なのは、古代都市を捉える観点である。この諸観点にしたがい、特定地域内に限定した比較研究を通じて、古代都市を相対的かつ多角的に認識することが最も合理的であろう。古代都市を捉える観点は、量的認識と質的認識に大別できる（表2）。量的認識とは、人口規模などの物理的性質や、都市空間の配置状況（空間論）など、絶対的な指標（数値）による把握を指す。他方、質的認識は、都市を諸関係の中で質的・相対的に捉える。こうした類型化に基づき、以下では既往研究における古代都市の認識を体系的に抽出・評価する。

## 2 量的認識

量的認識は、物理的認識と空間論的認識に区別できる。

物理的認識は、都市の人口規模・密度、都市域の面積に着目する。こうした観点からの定義は古くから行われており、人口規模は相対的に大きく、人口密度も高い状況が示されている（Wirth1938、Childe1950、Sjöberg1960、Bietak1979、Kostof1991、Smith2003・2019、Cowgill2004、Gates2011 etc.）。一方、人口規模についてより具体的な数値を提示する事例も散見される。この場合、数千人規模以上の人団を推定する論者が多い（Sjöberg1960、Trigger2003、Cowgill2004、Hansen2008）、なかには数万におよぶ人口を見込む場合もある（Adams1960、Kostof1991）。この人口規模の振れ幅は、おそらく主要な対象とした時代・地域の差を表していると考えられ、絶対的数値による都市の認識が難しいことを暗示している。

空間論的認識では、都市外部・内部の空間配置に関する議論が区別されなければならない。都市外部の研究では、都市はある空間上において「結節点」や「核」をなし、周辺と区別できる居住地として認識される（Wheatley1963、Hansen2008）。さらに、こうした都市はそれ単体では存在できず、周囲の町・村落と階層関係を築くことが前提とされている（Blanton1976、Kostof1991、Trigger2003、Thomas2010）。このように特定の地理的範囲における中心点として都市を見出す観点は、地理学における中心地理論から借用されたものである。ドイツの地理学者W.クリスタラー（Christaller）により1931年に提唱された中心地理論は、中心地（都市）の機能（行政、文化・宗教、社会、経済、交通・通信といった第3次産業）とそれにより提供される財（サービス）の到達範囲（消費者による財獲得の限界範囲）に着目して、中心地分布の理論を構築した（杉浦1989：pp.44-57）。例えば、最も上位の中心地B<sub>0</sub>を中心点とする特定財の到達範囲を半径20kmの真円として描いた場合、これよりも遠い地点（例えば、中心より21km）にこの財は供給されない<sup>4</sup>。この地点への供給をカバーするには、供給範囲がわずかにオーバーラップするように、同等レベルの中心地



$B_1 \sim B_6$  (B階層中心地) を  $B_0$  の周囲に均等に配置することになる。こうすると  $B_0$  からの到達範囲円周上に、供給範囲が交差する新たな中心地  $K_1 \sim K_6$  (K階層中心地) ができる。このようにして、到達範囲半径 1 km の財に至るまで、くまなく供給できるように中心地を最も効率的に配置する。結果として、中心地  $B_0$  (= 中心地 G) を核とする、階層化した中心地が均等に配置された 1 つの大きな市場地域が姿を現すことになる。R.E. ブラントンはこの理論を古代都市に応用し、「その形態や人口規模にかかわらず、中心地であるいざれの共同体も都市 (City or Town) である」と述べた (Blanton1976: p.253)。このような居住地間階層ネットワークの中で古代都市を認識する研究は、各地で行われている (西アジア地域については、Adams1981、Falconer・Savage1995、Polluck1999、Algaze2008など)。

都市内部の空間配置は、階層の上下 (Adams1960、Sjöberg1960、Kostof1991、Trigger2003)、公共・私有 (Smith2003、Woolf2020)、居住・非居住 (Marcus・Sabloff2008)、職業や民族 (Sjöberg1960) などの区別を反映すると考えられる。実際の空間配置は各文化・各都市にもよるであろうが、政治・宗教施設やエリート層邸宅が建ち並ぶ中心部の存在が、多くの場合に言及されている (Childe1950、Kostof1991、Trigger2003、Renfrew2008)。こうした中心部を核として周囲に街区が割り付けられる状況が、都市に特徴的と捉えられる。

### 3 質的認識

質的認識は、機能論的、社会関係論的、生態論的、認知論的認識を含んでいる。

機能論的認識は、とくにトリッガーにより体系的に取り組まれた。トリッガーは、都市を地方との関係性の中で専業的な機能を有する中心として捉えようとした (Trigger1972)。したがって、都市の機能とは、内的需要の充足ではなくて、より広範な地域の需要に応じたものであり、影響圏が村落とは大きく違う点が指摘される。こうした点を念頭に、都市が成長する因子として、11項目が挙げられた。これは実質的に、想定される都市の機能を示している。列挙すると、①集約的拡大農業による食料供給、②増加する地方人口あるいは失業者の受け皿、③工芸専業化、④市場取引・交易、⑤土地所有、⑥行政機関、⑦防衛、⑧宗教、⑨世俗的観光事業、⑩大学などの高等教育 (機関)、⑪上流階級における使用人 (の雇用)、となる。これらの機能の散逸は輸送やセキュリティにおいて不利となるため、ある時点で都市機能の集約が生じたと考えられる (Trigger1972: p.593)。ただし、機能的収斂は、社会毎で多様だったとみられる。

トリッガーによる上記の体系的な理解とは別に、都市の機能への言及は様々な形で散見される。都市が多様な機能の集約点として見なされている点は、多くの場合で共通している (Mumford1938、Sjöberg1960、Blanton1976、Bietak1979、Kostof1991、Cowgill2004、Marcus・Sabloff2008、Renfrew2008、Gates2011、Woolf2020 etc.)。とくに、政治・宗教・経

済の中心地が都市に所在すると考えられており、こうした機能は、宮殿や神殿建築物、豊富な交易品といった考古学的側面からも検証可能である (cf. Renfrew 2008)。他にも、文書記録や図像表現などの多用といった文化的機能 (Childe 1950、Sjöberg 1960、Kostof 1991、Trigger 2003) や、城壁の存在を前提にした防御機能 (Bietak 1979) が指摘されることもあるが、都市の通文化的な理解にはあまり適さない。

社会関係論的認識では主に都市内部に焦点が絞られ、社会階層の分化、職業の分掌化（専業化）が議論の核とされてきた。これらは、複雑化社会の研究において着目された特徴であった（前節参照）。生産力の発展を基礎とする社会階層（階級）の分化による支配者階級の出現こそが、記念碑的建造物の建立、従属性の工人による奢侈品の専業的生産、長距離交易などを促進し、都市（文明）の発展につながったというチャイルドの史的唯物論的な見解 (Childe 1950) をはじめとして、社会階層の分化が都市の重要な側面とみる傾向は強い (cf. Adams 1960、Sjöberg 1960、Bietak 1979、Kostof 1991、Smith 2003、Trigger 2003、Renfrew 2008、Gates 2011、Woolf 2020)。専業化についても、その程度の高低には異論があるものの、都市において必須要素とみなされている。こうした社会分化が生じたのであれば、都市を異質な集団の集合体と捉えることができる (e.g., Marcus・Sabloff 2008)。あわせて、外部との交流が盛んになることで多民族が共生した状況も推測され (Smith 2003・2019)、こうした異質な集団間の（食料・情報の取得のため）相互依存的な関係性もまた、都市の特徴とみなせるだろう (Fisher・Creekmore III 2004、Smith 2019)。

上記の他に、社会学における役割理論から都市を捉える試みがある。A.W. サウスオールは、特定社会内部における異なるレヴェルの役割関係の密度の高低により、都市化の程度を相対的に測定しようとした (Southall 1973)。ある社会の異なる個々人間でみられる相互関係（役割関係）を、血族関係、経済・職業、政治、儀礼／宗教、レクリエーション／余暇／ボランティアという5つの異なる類型の中で捉え、こうした関係性がどの程度複雑化しているかを調べるというものである。ほぼ理論的側面からのアプローチであるが、都市において、対面での個々人間の関係がより限定的な範囲で生じるようになり、役割関係がより多様化（とくに経済・職業分野において）・異質化し、個人が担う役割関係がより多重化する状況が推測された (Southall 1973: pp. 82-84)。この論点は興味深いが、物象化しにくい役割関係を考古学的側面からどの程度検証できるのか、という大きな問題がある。

生態論的認識は、外部環境との関係性から都市を捉える。この場合の外部環境とは、人工的環境である都市の後背地や遠方の異文化・社会、および、周辺の自然環境を指す。後背地との関係は、都市が中心地として後背地に社会・経済・政治的影響を及ぼした (Gates 2011) だけでなく、都市が後背地に食料供給を依存する状況 (Childe 1950、Trigger 1972、Kostof 1991、Woolf 2020) も含まれ、相互依存的と考えられる。また、都市と地方（後背地）

の生活様式は、著しい対照をなすとみなされる (Cowgill2004 : p.527)。

遠方の異文化・社会との関係は、概して長距離交易として認知される (Childe1950、Adams1960、Trigger1972、Hansen2008、Woolf2020)。長距離交易は各種原材料確保のために重要であったことが、資源に乏しい南メソポタミアの古代都市を念頭に議論したチャイルドにより言及されている (Childe1950)。のちに、ウルク世界システム (Uruk World System) という前4千年紀末における南メソポタミアからの植民活動の体系的理解 (Algaze1993・2008) や、古代ギリシア都市の研究 (Hansen2008 : pp.74-75) からも、長距離交易の重要性は改めて強調されている。

周辺・自然環境と都市との関係性は、論じられた事例があまりない。古くはマンフォードが、都市による自然環境の包摶と自然環境への人間文化の移植について言及している (Mumford1938 : p. 6)。また、Y.-F. チュアンは、都市を認識する際にその自然からの距離を相対的な指標とした (Tuan1978)。同論考では、①農耕生活からの距離 (居住民がどの程度農耕に関与しているか)、②農事暦からの距離 (どの程度季節に従って活動しているか)、③日々の生活の自然周期からの距離 (日中働き、夜は眠るという自然のサイクルがどの程度保たれているか)、を指標として挙げ、すべてについて自然状態からの隔たりがあるほど、居住地が都市的であると判断できると考えた。しかし、古代ギリシアにおいては、都市居住民の大部分が非第1次産業従事者だった (消費者都市) わけではなく、一定割合の「都市農耕民」が居住していたという見解もあるため (Hansen2008 : p.73)、上記の指標の妥当性は慎重に検証されるべきであろう。

認知論的認識は、都市を当時の居住者・当事者の目線から識別する観点であり、近年研究のポスト・プロセス的志向性 (歴史的主体としての個々人の重視; Johnson2020 : pp.113-114) の影響を反映している。同時代の史料にはしばしば、都市への言及が見られる。例えば、エジプト古王国 (前2686~2185年頃) の同時代史料では、城壁で囲まれた王都と私邑が区別されるのみであった (Bietak1979:pp.98-99)。他方、古代ローマでは、都市 (City)・町 (Town)・村落・小村落が相対的な人口の多寡に従い序列化され、区別されていたようである (Gates2011 : p. 2)。このように、時代・地域の違いにより、都市の認識はかなり異なることがわかる。

近年、都市における構築環境 (Built environment) の意味が注目されている。構築環境とは人工的に創出された環境を指し、都市を構成する建物・道路・区画・広場などが、その場所の意味を伝達する手掛かりとなる (ラボポート2006)。構築環境が伝える意味を考えるにあたり、以下の3つのレベルとその意味を区別する必要があるという (Rapoport 1988 : p.325)。

- 1) 上位レヴェル：宇宙観、世界観、哲学体系、神聖なもの
- 2) 中位レヴェル：アイデンティティを伝えるもの、地位、富、権力
- 3) 下位レヴェル：日常的かつ実用的な事柄（社会状況、期待される振る舞い、プライバシー、アクセシビリティ、着席位置、動作など）

この区別に基づいて、各階層の個々人が都市空間の形成に積極的にかかわっていたことを前提とし、各地の都市的居住地遺跡における構築環境に付与された意味について、考古学的検証が試みられた（Fisher・Creekmore 2014）。この際、上記の各レヴェルを表象する考古学的現象として、①インフラや公共建造物などからなる広範囲の都市景観、②特定の居住区など超世帯的空間、③個々の世帯空間、が挙げられた。

## IV 認識指標の再構築

### 1 属性による都市の認識

前節から、古代都市の量的認識は質的認識による社会現象の結果を捉えている、といふことがいえる。つまり、人口規模・密度や空間配置は、古代都市とその後背地の関係性や、内部における社会関係（階層化・専業化）の状態を反映している。また、質的認識の中でも、相互に複雑な相関が強くみられる。例えば、後背地との関係を重視する機能論的認識は、生態論的認識と切り離すことができない。加えて、認知論的認識における構築環境の意味論は、社会関係論的認識における階層分化という観点に依拠している。こうした状況は、古代都市を捉えるために多角的な視点が必要であることを端的に示している。

それでは、古代都市をどのように認識・表現すればよいのだろうか。M.E.スミスが示したように、属性による古代都市の評価とその比較が1つの方法であろう。スミスは、定義と型式による静態的な都市の分類を批判した上で、4類型（居住地の規模、社会的インパクト／都市的機能、構築環境、社会・経済的特徴）21項目からなる考古学的属性により都市性を評価した（Smith 2016・2020）。これは、該当する属性の多寡により、都市を判別するという類のものではない。都市とは、各地域・文化における居住地を属性に基づき比較分析することで、相対的に認識されるものである。こうした見解は本稿の意図に合致している。ただし、スミスが示した各属性では、考古学的証拠が示しうる状況は幾分曖昧である。例えば、第2類型（社会的インパクト／都市的機能）は王宮、王墓／上流貴族墓、大型（高位）神殿、公共建造物、工芸生産、市場／商店、という6属性を含むが、いずれの項目がどのような社会的インパクト／都市的機能を示しうるのか判断しがたい。この問題点を克服するためには、類型と属性の間に、中位の分類階層がぜひとも必要であろう。

そこで、上記で体系的に示した認識論に基づき、古代都市を捉えるための新たな属性を

表3 前4千年紀末頃のシリア・メソポタミアと前3千年紀前半の南レヴァントにおける都市の特徴

属性	考古学的指標	評価	南メソポタミア	シリア	南レヴァント		
			ウルク	ハーバ・カビーラ南	ベト・イエラハ	テル・ヤルムート	テル・アラド
規模	遺跡面積 (ha)	絶対値	250	22	30	25	9
	住居の密集度	高／低	—	高	高?	高	高
社会構造							
階層分化 (上流階級の出現)	大型公共建造物	有／否	○	○	○	○	△
	大型墓	有／否	—	—	—	—	—
	奢侈品・文書の集中	有／否	○	(○)	—	—	—
集団分化 (集団の異質性)	街区の存在	有／否	—	○	○?	○?	○
	住居配置の規則性	有／否	—	○	○?	○?	○?
	特定遺物の集中状況	記述的	神殿に交易品が集中	北東部に酸化鉛が集中	北部に硬質土器が集中	—	特定器種の集中
工芸専業化	製作址の規則的分布	有／否	—	○	—	—	—
	規格品	多／少	多	多	多	多	多
	農耕関連遺物	多／少	—	—	少	少	少
機能的多様性	宮殿・エリート邸宅	有／否	—	(○)	—	○	○?
	神殿・聖所	有／否	○	○	?	○	○
	貯蔵施設	有／否	(○)	—	○	—	—
	その他	記述的	—	—	—	長方形台状造構	水源管理施設?
構築環境							
都市景観の設計原理 (上位レヴェル)	地理的立地	記述的	河の南岸	河の西岸	湖の南西岸	丘陵上	丘陵の南縁
	基準軸	有／否	(○)	○	—	—	×?
	目抜き通り・街路	有／否	(○)	○	—	—	×
	公共スペース・空間	有／否	○	○	○	○	○
	城壁・城門	有／否	(○)	○	○	○	○
地区空間の設計原理 (中位レヴェル)	街区の形態	記述的	—	定形的?	—	定形的?	不定形
	街区の規模	大／小	—	大?	小?	—	小
	街区の配置	記述的	—	直交的	直交的?	直交的?	有機的
私的空間の設計原理 (下位レヴェル)	一般住居の形態	記述的	—	方形	方形	長方形	L字形
	住居の規模	大／小	—	やや大	小	小	小
	住居の配置	記述的	—	壁共有・隣接	壁共有・隣接	壁共有・隣接	壁共有・隣接
文化生態環境							
遠方外部との関係	交易品	多／少	多	—	少	少	少
	異質な文化の痕跡	多／少	多?	少?	少	少	少
	文化の混淆状況	記述的	—	—	明確な証拠なし	明確な証拠なし	明確な証拠なし
後背地との関係	周辺集落の痕跡	有／否	○	○	○	○	○
	周辺への道路	有／否	—	—	—	—	—
	周辺の遺物分布	記述的	—	—	—	—	—

\* ( ) = 不明確だが存在する可能性あり : — = 調査により未確認

提示する（表3）。この属性表は、「規模」、「社会構造」、「構築環境」、「文化生態環境」という4つの類型からなり、中位には前節で説明した古代都市の特徴的側面を再整理して示した。このうち「規模」のみが量的に認識される指標を示しており、他の3類型は質的に認識される指標である。下位には、古代都市の各特徴を示唆する考古学的指標32項目を列挙した。特定地域内の古代都市は、各属性の存否・高低・多寡・大小といった相対的な指標や具体的記述により、あくまでも相対的に認識される。なお、この方法では、同一地域・文化圏の他遺跡との属性比較により、居住地間の階層関係の有無や程度を別途評価する必要がある。

表3では具体的事例として、西アジアの2地域における大型居住地遺跡を取り上げた。1つは都市が自発的に出現したとされるシリア・メソポタミアであり、もう1つは、後発でありながらもシリア・メソポタミアの影響が認められない南レヴァントである（図1）。以下、属性表に照らして、両地域の代表的な大型居住地遺跡の諸特徴を概観する。

## 2 シリア・メソポタミアの事例

南メソポタミア（今日のイラク南部）のウルク（Uruk）は、前4千年紀末頃（ウルク後期）にはすでに都市化していたと考えられており、時に当時の領域国家の中心地であったともみなされる（Polluck1999：p. 5、Algaze2008：pp.109-110）。同遺跡における考古学調査は中心部の神殿域にはほぼ限られているため、「構築環境」の地区空間（中位レヴェル）・私的空间（下位レヴェル）と「文化生態環境」における後背地との関係は不明な部分が多い。しかし、街の中心に位置するアヌ聖域とエアンナ聖域という、多量の奢侈品・交易品・粘土板文書をともなう大型公共建造物（神殿）の存在は、階層分化が十分に進んでいたことを示している。また、エアンナ聖域の南東方向に階段が設けられていることから、街の軸線が北西-南東方向であったことが推測され（小泉2016）、都市景観を決定できるエリート層が存在した蓋然性が高いといえる。工芸品の製作址は未確認であるが、円筒印章や各種奢侈品、寸法が規格的な面取り口縁浅鉢（Beveled-rim bowl）が多量に出土することなどから、工芸品の専業的生産がかなり進んでいたこともわかる。さらに、階層化した社会を視覚的に表現した浮彫りが施されたアラバスター製容器（ウルクの大杯）や、王から始まる階級別に序列化された職業・称号目録（粘土板文書）の出土によっても、当時のウルク社会が階層化・分掌化していたことは明らかである（Nissen1988・2001）。

ウルクにおける情報不足を補うために、様相が比較的明らかになっている同時代の大型居住地遺跡ハブーバ・カビーラ南（Habuba Kabira South）にも目を向けてみたい。同遺跡は北シリアに位置しており、ウルク文化により植民・建設されたと考えられる。広大な面積

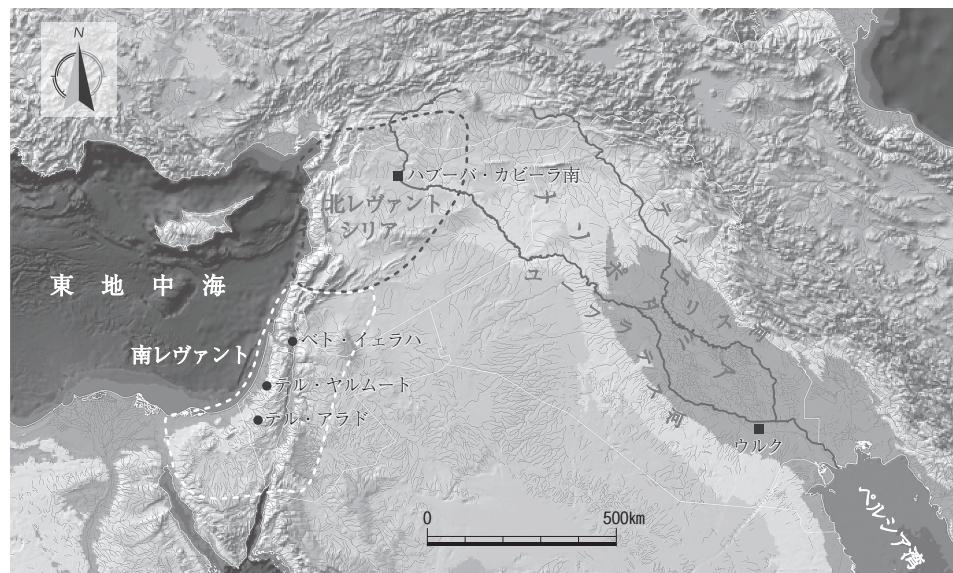


図1 シリア・メソポタミアおよび南レヴァントの位置と遺跡分布 1:20,000,000

(約 2 ha) が発掘調査され、ウルク後期の街の様相が明らかにされた (Algaze2008 : pp.71-72、小泉2016)。遺跡はユーフラテス河西岸に立地し、厚さ 3 m の直線的な城壁によって北・西面が区画され、おそらく長方形に近い平面形を呈していたと考えられる。城壁内は、ユーフラテス河に並行して南北に目抜き通りが走り、これとほぼ直交して街路が設置された。また、都市建設時には、あらかじめ排水網が整備されたことがわかっている。遺跡南部の小丘上には、神殿／聖域（テル・カンナス Tell Qannas）が位置する。上記の証拠から、ウルクと同様、階層が十分に分化していた可能性が高い。工芸専業化の証左も確認された。遺跡北部には土器工房が所在し、酸化鉛塊の集中が見られることから、銀の生産工房も存在したと推測される。なお、街区は矩形の区画が単位になっていたと思われる。住居はウルク文化に特徴的な型式で、中庭を取り囲むように小部屋が配置される方形プランを呈し、隣接住居は互いに壁を共有して密集する。ウルク文化以外の外的な影響は概して少ないと思われ、同遺跡が在地文化から一線を画した植民都市であったことを暗示している。

### 3 南レヴァントの事例

南レヴァント（今日のイスラエル・ヨルダンとその周辺域）では、前3100／3000年頃に都市が発生したと考えられているが、その証拠が明確に認められるのは前2800～2600年頃になってからである (Greenberg2019)。表3では、同時期の代表的な大型居住地として、3 遺跡（ベト・イエラハ Beth Yerah、テル・ヤルムート Tel Yarmuth、テル・アラド Tel Arad）を取り上げた。いずれも他の大型居住地遺跡に比べて様相がより明らかになっているが、南メソポタミアとは異なり文書記録が一切出土しないため、当時の社会状況には考古学的証拠から迫るほかない。いずれの遺跡においても大型公共建造物は確認されており、とくにベト・イエラハとテル・ヤルムートではそれぞれ、祭祀も行われたと考えられる大型貯蔵施設 (Greenberg et al.2006) と、大型宮殿建物が検出された (Miroschedji1999)。このため、少なくとも両遺跡では、階層分化が十分に進んでいた蓋然性が高い。なお、テル・アラドでは、水源管理施設と考えられる建物と城壁を除いて、大型公共建造物は認められない。

街区は、テル・アラドにおいてのみ明確に認められた。同遺跡では直線的な目抜き通りや街路は存在せず、L字形の家屋と不定形な前庭からなる住居により、不定形な街区が形成されていた (Amiran et al.1978)。他方、ベト・イエラハとテル・ヤルムートでは、部分的にしか検出されていないものの、相互に壁を共有して密集する小型方形住居により、直交的・定形的な街区が形成されていたことが示唆される。

南レヴァントにおける同時代の大型居住地遺跡全般において、外部との関係を示す考古学的証拠は概して希薄である。なお、大型居住地遺跡の後背地には複数の小村落の痕跡が認められているが、発掘調査が行われた事例に乏しく、その実態は明らかではない。

## V おわりに

本稿ではまず、既往研究において社会の複雑化と都市の発生との相関について概観し、都市は国家段階の社会に必須の要素であり、その出現は、階層化・専業化がより進んだ複雑な先国家社会に遡りうることを確認した。上記を踏まえて、これまでの古代都市の認識論を量的・質的認識に区別して体系的に考察し、古代都市の認識に必要な指標を抽出した。この考察に基づいて、古代都市を捉えるための属性を新たに提示し、事例として、シリヤ・メソポタミアと南レヴァントにおける大型居住地遺跡を簡易的に評価した。属性での評価により改めて明確になったのは、両地域でこれまで都市とみなされてきた考古学的現象は、相互に異なる性質を帯びていた蓋然性が高いということである。地域間の差異が最も顕著であったのは、外部との関係性である。南メソポタミアのウルクでは遠方からの交易品が多量に出土したのに対して、南レヴァント諸遺跡ではその証拠は希薄であった。こうした結果は、通文化的な指標による古代都市の把握が難しいということ、また、都市的居住地は特定地域・文化内に限定して相対的に認識されるべきであるということを明確に示している。

ただし、最初期の古代都市とみなされる大型居住地遺跡の多くでは、その全体像が不明なままである。とくに、階層化や専業化という従来からの指標への偏重から、大型居住地遺跡の調査は概して大型公共建造物とその周辺に集中し、一般居住区の情報に乏しいことが多い。今後は、より多角的に都市を認識・比較できるよう、こうした状況の改善を念頭に調査研究を進めるべきであろう。

### 註

- 1 階級とは、血縁関係ではなく、共通する文化・民族・宗教および高度に専業化した職業に基づき、その構成員の専門化した目的を追求するために団結する社会横断的なまとまりを指す (cf. Trigger2003 : pp. 47-48)。
- 2 チャイルドが「都市革命」を論じた際に示した10項目 (Childe1950) は、単に都市のみを定義したものと誤解されることが多い。しかし内容を精査すると、これらの項目は「都市革命」により成立した社会（階層化社会あるいは国家）にも該当することが理解できる (cf. Smith2009・2020)。
- 3 M.L.スミスは、量的な基準に基づいた都市の定義は、都市活動の動態的な側面を覆い隠してしまうと述べている (Smith2003 : p. 8)。また、人口規模・密度・面積などの量的指標は便利であるが、古代都市には適用しづらいという側面も強調されている (Smith2003 : p. 2019)。
- 4 中世における馬車の1日の旅程は約20kmとされ、また、クリスターが分析対象とした南ドイツ農村部では小都市は21km間隔で分布していた (杉浦1989 : p. 48)。

## 参考文献

- Adams, R. McC. 1956 Some Hypotheses on the Development of Early Civilizations. *American Antiquity* 21(3): 227-232.
- Adams, R. McC. 1960 The Origin of Cities. *Scientific American* 203(3): 3-10.
- Adams, R. McC. 1966 *The Evolution of Urban Society: Early Mesopotamia and Prehispanic Mexico*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- Adams, R. McC. 1981 *Heartland of Cities*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London: The University of Chicago Press. (Second Edition in 2005)
- Algaze, G. 2008 *Ancient Mesopotamia at the Dawn of Civilization: The Evolution of an Urban Landscape*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Amiran, R., Paran, U., Shiloh, Y., Brown, R., Tssafrir, Y. and Ben-Tor, A. 1978 *Early Arad I: The Chalcolithic Settlement and Early Bronze City, First-Fifth Seasons of Excavations, 1962-1966*. Jerusalem: The Israel Exploration Society.
- Bietak, M. 1979 Urban Archaeology and the "Town Problem" in Ancient Egypt. In Weeks, K. R. (ed.), *Egyptology and the Social Sciences: Five Studies*. 97-144. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Blanton, R. E. 1976 Anthropological Studies of Cities. *Annual Review of Anthropology* 5: 249-264.
- Burgess, E. W. 1926 *The Urban Community*. Chicago: University of Chicago Press.
- Carneiro, R. L. 1970 A Theory of the Origin of the State. *Science* 169: 733-738.
- Carneiro, R. L. 1981 The Chiefdom as Precursor of the State. In Jones, G. and Kautz, R. (eds.), *The Transition to Statehood in the New World*. 37-79. Cambridge: Cambridge University Press.
- Childe, V. G. 1936 *Man Makes Himself*. London: Watts. (チャイルド, G. (ねずまさし訳) 1957 『文明の起源』改訂版 岩波新書(青版) 69)
- Childe, V. G. 1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21(1): 3-17.
- Cowgill, G. L. 2004 Origins and Development of Urbanism: Archaeological Perspectives. *Annual Review of Anthropology* 33: 525-549.
- Earle, T. K. 1987 Chiefdoms in Archaeological and Ethnohistorical Perspective. *Annual Review of Anthropology* 16: 279-308.
- Earle, T. K. (ed.) 1991 *Chiefdoms: Power, Economy, and Ideology*. Cambridge, New York, and Melbourne: Cambridge University Press.
- Falconer, S. E. and Savage, S. H. 1995 Heartlands and Hinterlands: Alternative Trajectories of Early Urbanization in Mesopotamia and Southern Levant. *American Antiquities* 60(1): 37-58.
- Feinman, G. M. and Marcus, J. (eds.) 1997 *Archaic States*. Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- Feinman, G. and Neitzel, J. 1984 Too Many Types: An Overview of Sedentary Prestate Societies in the Americas. *Advances in Archaeological Method and Theory* 7: 39-102.
- Fisher, K. D. and Creekmore III, A. T. 2014 Making Ancient Cities: New Perspectives on the Production of Urban Places. In Creekmore III, A. T. and Fisher, K. D. (eds.), *Making Ancient*

- Cities: Space and Place in Early Urban Societies.* 1-31. New York: Cambridge University Press.
- Flannery, K. V. 1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399-426.
- Fried, M. H. 1967 *The Evolution of Political Society*. New York: Random House.
- Gates, C. 2011 *Ancient Cities: The Archaeology of Urban Life in the Ancient Near East and Egypt, Greece, and Rome*. Second Edition. London and New York: Routledge.
- Greenberg, R. 2019 *The Archaeology of the Bronze Age Levant: From Urban Origins to the Demise of City-States, 3700-1000 BCE*. Cambridge World Archaeology. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenberg, R., Eisenberg, E., Paz, S and Paz, Y. 2006 *Bet Yerah: The Early Bronze Age Mound, Volume I: Excavation Reports, 1933-1986*. IAA Report, No. 30. Jerusalem: Israel Antiquities Authority.
- Hansen, M. H. 2008 Analyzing Cities. In Marcus, J. and Sabloff, J. A. (eds.), *The Ancient City: New Perspectives on Urbanism in the Old and New World*. 67-76. Santa Fe, NM: SAR Press.
- Johnson, M. 2020 *Archaeological Theory: An Introduction*. Third Edition. Oxford: Wiley Blackwell.
- Kostof, S. 1991 *The City Shaped: Urban Patterns and Meanings through History*. Boston: A Bulfinch Press Book of Little, Brown and Company.
- Kristiansen, K. 1991 Chiefdom, States, and System of Social Evolution. In Earle, T. (ed.), *Chiefdoms: Power, Economy, and Ideology*. 16-43. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Marcus, J. and Feinman, G. M. 1997 Introduction. In Feinman, G. M. and Marcus, J. (eds.), *Archaic States*. 3-13. School of American Research Advanced Seminar Series. Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- Miroschedji, P.de 1999 Yarmouth: The Dawn of City-States in Southern Canaan. *Near Eastern Archaeology* 62: 2-19.
- Mumford, L. 1938 *The Culture of Cities*. San Diego, New York, and London: A Harvest/HBJ Book.
- Nissen, H. J. 1988 *The Early History of the Ancient Near East*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nissen, H. J. 2001 Cultural and Political Networks in the Ancient Near East during the Fourth and Third Millennia B.C. In Rothman, M. (ed.), *Uruk Mesopotamia and Its Neighbors*. 149-180. Santa Fe: SAR Press.
- Polluck, S. 1999 *Ancient Mesopotamia: The Eden that Never Was*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rapoport, A. 1988 Levels of Meaning in the Built Environment. Poyatos, F. (ed.), *Cross-Cultural Perspectives in Nonverbal Communication*. 317-336. Toronto: C. J. Hogrefe.
- Renfrew, C. 1973 Monuments, Mobilization and Social Organization in Neolithic Wessex. In Renfrew, C. (ed.), *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. 539-558. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

- Renfrew, C. 1974 Beyond A Subsistence Economy: The Evolution of Social Organization in Prehistoric Europe. In Moore, C. B. (ed.), *Reconstructing Complex Societies*. 69–95. Bulletin of the American Schools of Oriental Research Supplement 20.
- Renfrew, C. 2008 The City through Time and Space: Transformations of Centrality. In Marcus, J. and Sabloff, J. A. (eds.), *The Ancient City: New Perspectives on Urbanism in the Old and New World*. 29–51. Santa Fe, NM: SAR Press.
- Sahlins, M. D. 1958 *Social Stratification in Polynesia*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Service, E. R. 1962 *Primitive Social Organization*. New York: Random House.
- Service, E. R. 1975 *Origins of the State and Civilization*. New York: Norton.
- Sjöberg, G. 1960 *The Preindustrial City: Past and Present*. Glencoe, IL: The Free Press.
- Smith, M. E. 2009 V. Gordon Childe and the Urban Revolution: A Historical Perspective on A Revolution in Urban Studies. *Town Planning Review* 80(1): 3–29.
- Smith, M. E. 2012 Archaeology, Early Complex Societies, and Comparative Social Science History. In Smith, M. E. (ed.), *The Comparative Archaeology of Complex Societies*. 321–329. New York: Cambridge University Press.
- Smith, M. E. 2016 How Can Archaeologists Identify Early Cities? Definitions, Types, and Attributes, In Fernández-Götz, M. and Krausse, D (eds.), *Eurasia at the Dawn of History: Urbanization and Social Change*. 153–168. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, M. E. 2020 Definitions and Comparisons in Urban Archaeology. *Journal of Urban Archaeology* 1: 15–30.
- Smith, M. L. 2003 Introduction. In Smith, M. L. (ed.), *The Social Construction of Ancient Cities*. 1–36. Washington D. C.: Smithsonian Books.
- Smith, M. L. 2019 *Cities: The First 6,000 Years*. New York: Simon & Schuster Ltd.
- Southall, A. W. 1973 The Density of Role-Relationships as a Universal Index of Urbanization. In Southall, A. W. (ed.), *Urban Anthropology: Cross-Cultural Studies of Urbanization*. 71–106. New York: Oxford University Press.
- Spencer, H. 1878 *The Principles of Sociology*. New York: D. Appleton and Company.
- Steward, J. H. 1949 Cultural Causality and Law: A Trial Formation of the Development of Early Civilizations. *American Anthropologist* 51(1): 1–27.
- Steward, J. H. 1955 *Theory of Cultural Change*. Urbana: University of Illinois Press.
- Thomas, A. R. 2010 *The Evolution of the Ancient City: Urban Theory and the Archaeology of the Fertile Crescent*. Lanham and Plymouth: Lexington Books.
- Trigger, B. G. 1972 Determination of Urban Growth in Pre-Industrial Societies. In Ucko, P. J., Tringham, R., and Dimbleby, G. W. (eds.), *Man, Settlement and Urbanism*. 575–599. Gloucester Crescent: Duckworth.
- Trigger, B. G. 2003 *Understanding Early Civilizations: A Comparative Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trigger, B. G. 2008 Early Cities: Craft Workers, King, and Controlling the Supernatural. In Marcus, J. and Sabloff, J. A. (eds.), *The Ancient City: New Perspectives on Urbanism in the Old and New World*. 53–66. Santa Fe, NM: SAR Press.

- Tuan, Y.-F. 1978 The City: Its Distance from Nature. *Geographical Review* 68(1): 1-12.
- Tylor, E. B. 1865 *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*. London: John Murray.
- Wheatley, P. 1963 What the Greatness of a City is said to be: Reflections on Sjöberg's "Pre-industrial City." *Pacific Viewpoint* 4(1): 163-188.
- White, L. A. 1949 *The Science of Culture*. New York: Farrar, Straus.
- Wirth, L. 1938 Urbanism as a Way of Life. *American Journal of Sociology* 44(1): 1-24.
- Woolf, G. 2020 *The Life and Death of Ancient Cities: A Natural History*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, H. T. 1994 Prestate Political Formations. In Stein, G. and Rothman, M. (eds.), *Chiefdoms and Early States in the Near East: The Organizational Dynamics of Complexity*. 67-84. Monographs in World Archaeology. Madison, WI: Prehistory Press.
- Yoffee, N. 1993 Too Many Chiefs? (or, Safe Texts for the '90s). In Yoffee, N. and Sherratt, A. (eds.), *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?* 60-78. Cambridge, New York, and Melbourne: Cambridge University Press.
- Yoffee, N. 2004 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ギデンズ, A. (松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・松川昭子・内田健訳) 2002 『社会学』改訂第3版 東京 而立書房。(Giddens, A. 1997 *Sociology: A Brief but Critical Introduction*. Third Edition. Basingstoke: Palgrave Macmillan.)
- 小泉龍人 2016 『都市の起源—古代の先進地域=西アジアを掘る』 東京 講談社。
- 杉浦芳夫 1989 『立地と空間行動』 地理学講座第5巻 古今書院。
- トリッガー, B.G. (川西宏幸訳) 2001 『初期文明の比較考古学』 東京 同成社。(Trigger, B. G. 1993 *Early Civilizations: Ancient Egypt in Context*. Cairo: The American University in Cairo Press.)
- 別府春海 1959 「19世紀の文化進化論：その前提と方法の再評価」『民族學研究』第23巻3号 pp. 243-248。
- モルガン, L.H. (青山道夫訳) 1961 『古代社会』 東京 岩波書店。(Morgan, L. H. 1877 *Ancient Society*. New York: Holt.)
- 米山俊直 1965 「社会進化論の新しい展開—「民族学理論における最近の諸問題」のひとつとして—」『民族學研究』第30巻2号 pp. 99-108。
- ラポポート, A. (高橋鷹志監訳・花里俊廣訳) 2006 『構築環境の意味を読む』 彰国社。(Rapoport, A. 1990 *The Meaning of the Built Environment*. Tucson, AZ: The University of Arizona Press.)
- レンフリー, C. (大貫良夫訳) 1979 『文明の誕生』 岩波現代選書32 岩波書店。(Renfrew, C. 1973 *Before Civilization: The Radiocarbon Revolution and Prehistoric Europe*. London: Jonathan Cape.)

#### 挿図出典

図1：筆者作成